

地域課題解決へと向かう教育者を育てる
教育心理学者の七転八倒
指定討論

弘前大学 人文社会科学部

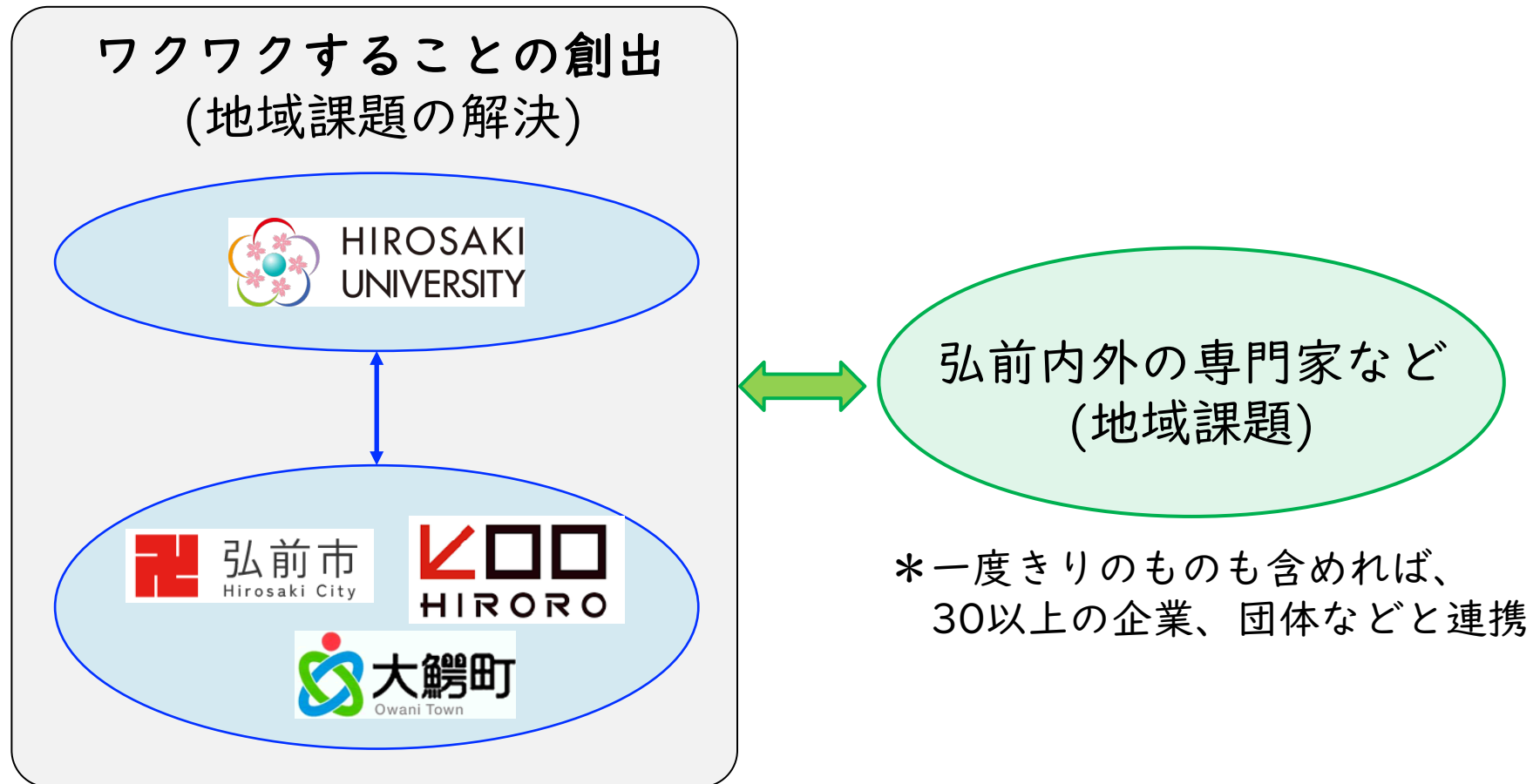
古村健太郎

(k-komura@hirosaki-u.ac.jp)



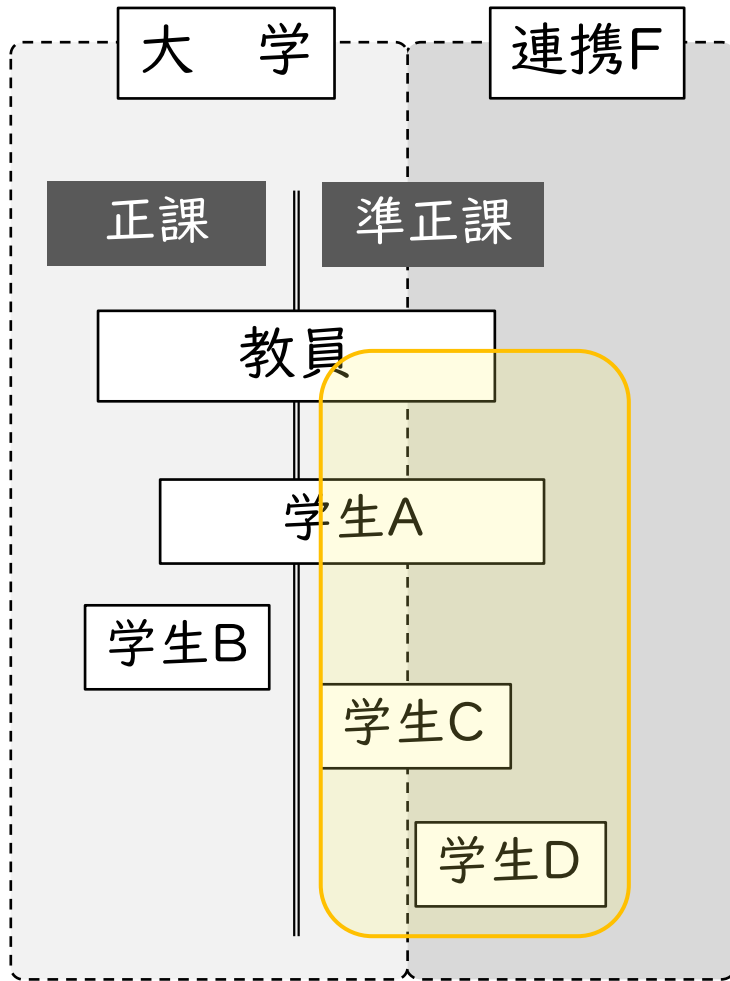
やっていること

- 弘前市周辺を「実験場」とした社会的インパクト創出の試み
 - オープンソリューション？



理論や研究ベースではなく、体験ベースの質問になります
ご容赦ください

ご発表の大まかなフレームワーク



■ 準正課活動の学生の活動

- 自主性、エージェンシーを育てる
- 学びの姿、正統的周辺参加

■ 個人個人のターニングポイントは？

- 定型的ではない、それぞれの学生の道筋があるはず
- 逆にフェードアウトして行く学生には何が？

■ 学生の自主性とは？

- 自主的な活動は質が低い場合も
→ 大人のテコ入れが生じたとき、それは自主的？
- 活動そのもの + 活動が生み出され、変容するプロセスは？

あのまち このまち 地域ワイド

調査実習に取り組んだ学生たち(古村准教授提供)



ジェンダー理解楽曲で

弘大生、実習通じ制作

弘 前

ジェンダー問題を分かりやすく考えてもらおうと、弘前大学人文社会科学部地域行動コースの学生班が、調査実習を通じてオリジナル楽曲を制作した。無意識に男女で固定化された役割や振る舞いが原因で、互いの気持ちがあすれ違

う様子を歌詞に落とし込んだもので、学生の呼び掛けからシンガーソングライターが多田慎也さんが作詞作曲、RINGOMUSUME(りんご娘)のジョナゴールドさんが歌唱を担当。地元のクリエイターの協力を得て、多くの人に気付きを与えようと取り組んでいる。(福田藍至)



レコーディングに臨むジョナゴールドさん(左)と多田さん

男女の固定観念、すれ違いを歌詞に

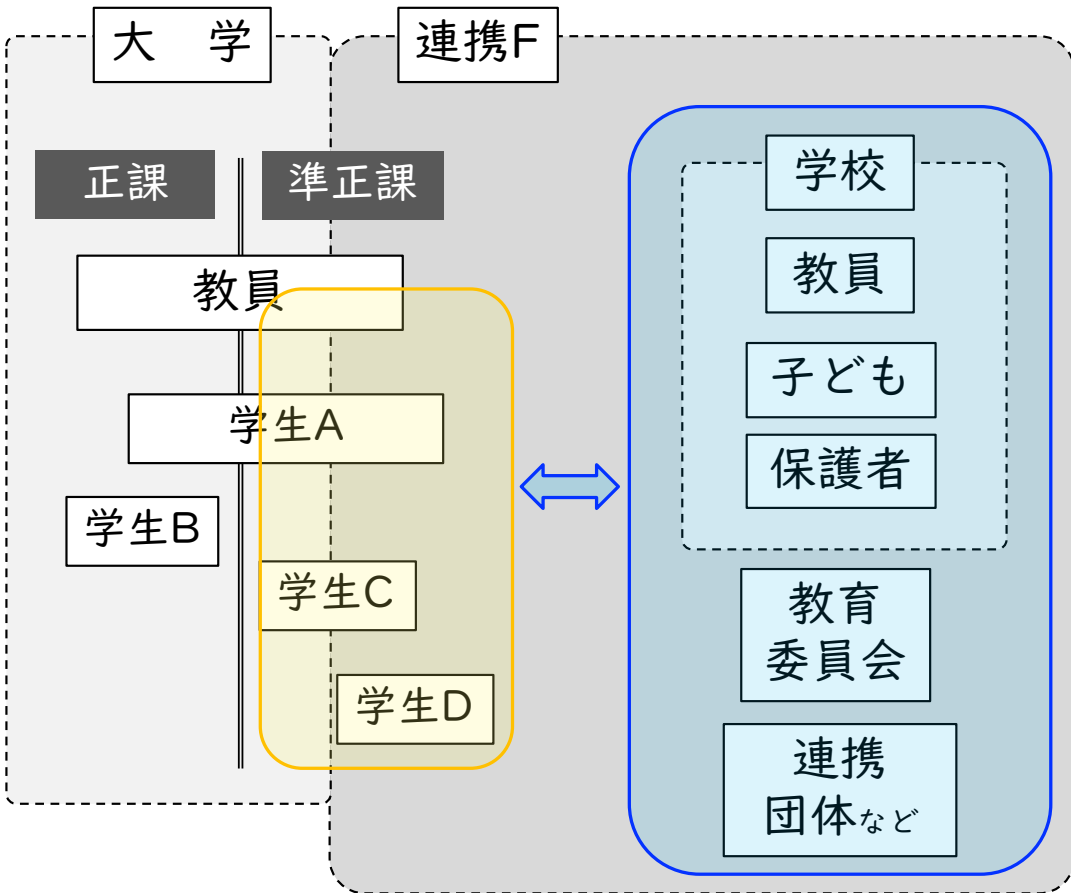
2〜4年生10人の班で昨春から行った調査実習は、社会的な行動を変容させることをテーマに、ジェンダー問題に課題を設定。19〜63歳の男女17人から性別による生きづらさを聞いた具体的なエピソードを聞き取ったところ、それらは固定観念やコミュニケーション不足が要因で、行動の意図や背景を相手に伝えることによって、ある程度は行き違いが解消できるのではと推察した。

コミュニケーションを生まみ出すきっかけとして上がったアイデアの一つが楽曲。同じメロディーでありながら、男女の視点で歌詞が異なる楽曲を考えた。調査で集めた具体例の他、学生も考えや体験談を出し合い、それらを原案に多田さんが歌詞に組み立てた。デートで互いの思いがすれ違う様子が表現されているが、「男性がリードすべき」「女性化粧をして飾るべき」というような観念や、「時間いっばいで身だしなみを整えてい

た相手の振る舞いを知らない」「照れ隠しの言葉は全音で受け止めて落ち込む」といった理解不足が含まれている。「学生たちが気づいてきた観念を見て、男女の『あ』は音も今も根本は変わらない、同じ『あ』を聞くと『あ』と多田さん、音楽行動変容を促すというのはいずれも『あ』。単に『あ』と『あ』でなく、社会を変えていくためには、期待感がある

「すれ違いロマンス」 ■ 男子学生のエピソード (省略)

実際は？



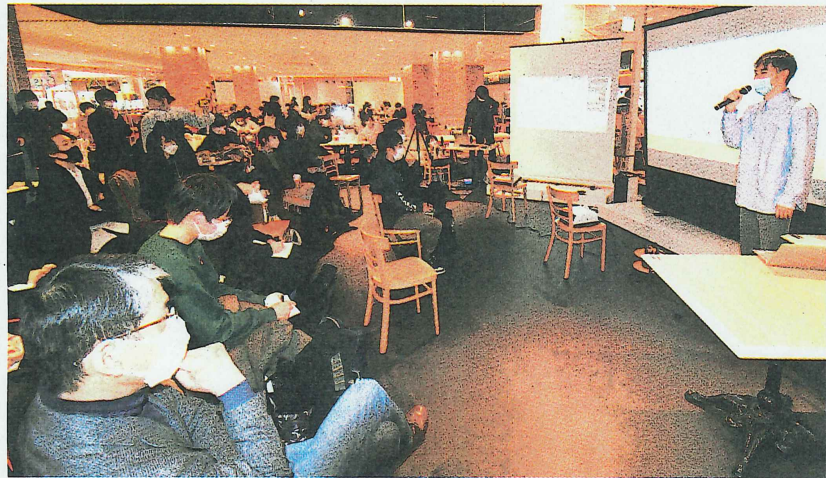
■ エコシステムが存在？

- 活動の目標や内容は外部に相当依存
 - ✓ 信州ではできて松山ではできない（富田発表）
- スタートの調整で、活動は相当規定される
- 活動目標がどのように設定されたか、
どう変容したか
 - e.g., こちらの提案 or あちらの相談，目標の変遷は？
- 静的ではなく、ダイナミックなプロセス
 - ✓ 学生の葛藤、大学や学校の柔軟性のなさ
 - ✓ ゲームというモノを通じた立場逆転
 - ✓ 活動がいかに生まれ，変容したかは、
より大きな枠組みの中で捉えるべきだろう

弘前大学人文社会科学部は4日、地域行動コースの社会調査実習成果発表会を弘前市のヒロロで開いた。「人の行動を変えるきっかけは作れるか」「持続可能な地域を作るために」といったテーマの

下、2、3年の学生約100人が4班に分かれて活動した成果を紹介した。珍しいフードコート内での発表ということもあり、訪れた市民が足を止めて聞き入る姿も見られた。
(齋絢一郎)

フードコートで成果発表



弘前大学人文社会科学部の社会調査実習
各班の活動、市民に公開

発表会はヒロロを走る「マイタウンひろ」との共催。
通常は学内で実施される発表会を、多様なコケーションが図れる市民にも公開した。学は4階のフードコート、2階のUTAYA BOORORE HIROROでポスター展示による発表を行った。
「人の行動を変えるきっかけは作れるか」となマで活動した「インSC」は、ネガティブ象を持たれがちな若者を、ポジティブな象を取り組みを展開する発表者の五十嵐大樹さん(右)

恋愛と推し活の関係性考察／弘大生が発表



商業施設というオープンな場で行われた社会調査実習成果発表会

2024年度 大鰐みらいづくりプロジェクト（仮）

学生たちのアイデアを実現してあげたい → 自分たちのアイデアを実現したい

大鰐の未来 私たちで



町民にリサーチしながら「推しスポット」を探す
町職員と学生

町職員と弘大生協働プロジェクト始動

大鰐町職員と弘前大学の学生が協働で新たなまちづくりを提案する「大鰐未来づくりプロジェクト」が25日、スタートした。プロジェクトは通年で実施し、フィールドワークやワークショップなどを通じて、町が目指すべきロードマップを作成し、町側に提案する。

（稲葉智悠）

通年で活性化 ヒント探る

町は昨年12月、同大人文社会科学部・古村健太郎准教授のゼミと協働で、無料通信アプリLINE（ライン）に公式アカウント「わにLINE」を開設。これを機に、町と同大は連携協力に関する包括連携協定を締結した。

今年度は町振興計画で掲げる「協働によるまちづくり」の一環で同プロジェクトを立ち上げた。プロジェクトでは、古村教授が担当する科目「社会調査実習」を履修する2、3年生17人と町職員13人が連携して、ワークショップなどを通じて町が目指すべきロードマップを作成し、地域活性化に向けた町事業への活用を目指す。

初回は「大鰐町再発見」



職員のアイデアを実現するために部署横断で話す場を創発

全員に質問です

- 準正課活動の取り組みを、関係性やダイナミックな変化の中で捉えたとき、学生の成長について新しい見え方が生まれませんか？
- 準正課活動の取り組みは、既存の関係性の中で学校（教師、子ども、保護者）や地域、コミュニティにどのようなインパクトを与えたのでしょうか？
 - ✓ 学校は変わったのか？
 - ✓ 静的な／固定的な存在として捉えていないか？
- 実践の発信を受け止める人々（例えば、学会）への要望は？